

“「続けることで研ぎ澄まされる“気づく力”」——

肝炎医療コーディネーター・薬剤師 梅田文人さんの8年の軌跡

—— 変化の時代に、薬局から患者の未来を守り続ける人

◆ 誇り —— ホームランのような劇的な成果よりも、日々の「小さな気づき」

「ホームランは少なくてもいいんです。でも、“あ、これ気になるな”と気づけるようになった。それが患者さんを守る一番の力になっていると思います」。薬剤師であり、肝炎医療コーディネーター（肝Co）でもある梅田文人さん。8年前、「寄り添い」「対話」を大切にしていた姿はそのままに、今は“患者全体を見渡す視点”を手に入れている。薬の受け渡しの先にある“人生”まで見る薬剤師へと、静かに、そして力強く進化してきた8年間だった。

◆ 【はじまり（8年前）】 —— 「薬局だからできること」からのスタート

8年前のインタビューで梅田さんは、「薬局は患者さんにとって話しやすい場所。いつでも相談できる『クッション』だからこそ、肝炎の気づき役にになれる」と語っていた。当時はC型肝炎の画期的な新薬が登場し始めた頃。梅田さんの主な関心は、とにかく「隠れた肝炎患者を見逃さないこと」にあった。

◆ 【変化と成長の8年】 —— 視点は「肝炎だけ」から「患者全体」へ

この8年間で、薬局を取り巻く環境は大きく変わった。マイナ保険証や電子処方箋の普及等により、ASTやALTなどの検査値が薬局でも確認できるようになったのだ。「検査値が見えるようになったことで、肝炎だけでなく、脂肪肝や生活習慣病など、他の異変にも自然と目が止まるようになりました」。さらに梅田さん自身も、より患者を広く支えるため「がん専門薬剤師」の取得を目指して研修を重ねている。視点は「肝炎」という一つの疾患から、生活習慣、他疾患、そして患者の人生全体を見るものへと大きく広がっていった。

◆ 【手探りの現場と変わらない信念】 —— 薬局は「最後の砦」

DAAと言われる内服薬によるC型肝炎の治療が普及し、C型肝炎の治療件数自体は減った。以前のような劇的な成果は出にくい。しかし、だからこそ「気づく力」が重要になる。例えばB型肝炎の治療薬。食間に飲む薬は飲み忘れが発生しやすい。そこに気づき、患者のライフスタイルに合わせて食後に飲める薬への変更を医師に提案する。また、がん治療が始まった患者の処方を見て、「B型肝炎の再活性化を防ぐ薬が抜け落ちていないか」を確認し、病院の出し忘れを未然に防いだこともあった。「薬局でここを見落とすと、患者さんは次の受診まで誰にも相談できない。薬剤師は“最後の砦”だと、8年前と変わらず今も思っています」

◆ 【つながり】 —— 資格や知識を超えて、患者が選ぶのは「人」

長く活動を続けてこられた理由を尋ねると、こんな答えが返ってきた。「総合病院の処方でも、わざわざ僕の薬局に戻ってきてくれた患者さんがいました。『あなたに見てほしい』と言われた時、ああ、続けてよかったと思いました」。資格や知識も重要だが、最終的に患者が選ぶのは“人”だ。梅田さんが8年間、真摯に積み重ねてきた信頼関係が、その言葉に表れている。

◆ 【今と未来・後輩へのメッセージ】 —— 続けることで見える世界が変わる

最後に、これから活動を始める薬剤師やコーディネーターに向けて、梅田さんはこう語る。「ホームランのような一発の大きな成果はなくていいんです。年に1回でも研修に行けば、意識が戻る。資格を持っているだけでアンテナが立ち、気づける瞬間が確実に増えます。知識を入れたことで、患者さんに今までと違う視点で接せることが、すでに成果なんです。その小さな気づきの積み重ねが、患者さんの人生を守ることにつながります」。

薬局業務の中、地域連携薬局の肝炎Coとして身近な相談窓口としての役割を担っている梅田さん。「続けているから気づける」その言葉こそが、梅田さんの8年間の軌跡と、肝Coを継続することの本当の意義を物語っている。

PROFILE



なごみ薬局 管理薬剤師
梅田文人 UMEDA FUMIHIRO